体温で守られているため、それは子グマの死に直結します。

慌てて子グマを胸に抱き、人肌で温め、ストーブのそばで落ち着くのを待ちました。その後、脈も小さくなる子グマに口を当て、息を吸ったりはいたりと人工呼吸をほどこしました。さらにミルクを哺乳瓶に入れ口元に持っていくが、子グマは飲むことができません。そのとき、「そうだ、クマのおっぱいは人間のおっぱいとそっくりだから、私のおっぱいなら吸ってくれるかもしれない」と思いつき、胸を出し、そっと子グマの口元に乳首を持っていくと…。子グマに生気が蘇ったように突然力がこもると首をもたげて乳首に吸い付きました。力は弱いけれど、間違いなく吸っています。はっきりとわかった時点で哺乳瓶の乳首に入れ替えました。すると子グマはミルクを飲み始めたのです。

「今までグンニャリしていた体、寝ていた毛がフッと立ち、みるみる光を帯びて輝き始めた。命が灯った瞬間でした」。

子グマに自分の乳首を吸わせ、お尻をなめて排泄を促した前田さん。またあるときは、冬ごもり前のクマとともに山の上で暮らし、24時間、体を通してクマを感じ、クマになりきることに没頭しました。

「次第に、空気のにおい、動き、湿り具合、日の出、日の入り、風のリズム、音の来る方向など感覚器が敏感になり、ついには夢までもにおいで見ることが多くなりました」。

クマと暮らして見えてきたもの。それは、地球という生命体の中に、私たちは生かされているということ。自然界はお互いに生きていくための絶妙なバランスを保っているということでした。

●のぼりべつクマ牧場　北海道登別市登別温泉町224
TEL0143-84-2225　http://www.bearpark.jp

すべての根源は無償の愛

前田さんは話します。

「マザーアース」という通り、母なる地球で、私たち人間は命を与えられ生きています。人間がその根本を忘れ、お金や名誉、権力などを持ってしまったときから、環境、教育、経済など、すべてが少しずつ狂い始めています。

絶えず大自然と向き合い、生きていくことを強いられているヒグマの母親は、命がけで子どもを産み育て、「生きること」を教えます。それは同時に、自然界の法則に従い、子孫を残し命をつなげていくという行為でもあります。

このような、愛情や本能に基づく無償の行為を取り戻すことが、成熟した社会、循環していく社会をつくるために一番必要なことだと思います。

今の日本はどうでしょう。皆1円でも多く儲けること、1点でもいい点を取ることばかり。毎日、「早くしなさい」「勉強しなさい」と口うるさく言う「母親病」にかかったお母さん、子どもの本能を信じて、少し放っておくことです。夫も子どもも会社や学校という社会に出て、死に物狂いでがんばっています。いくら稼いだとか、何点取ったとか、そんなことで追い詰めない。十分でないことは本人が一番よくわかっているのですから、もっと大きな心で見守ってあげましょう。母親が権力で支配した途端、家庭は崩壊し、子どもは命を落とします。お父さんが家で威張ったり愚痴を言ったり、子どもがわがままを言ったり反抗したり。そんな行動に出ているうちはまだよくて、変に「いいお父さん」や「いい子」は危険です。そのうちダムが決壊して大惨事が起きるかもしれません。

毎日のように起こる事件や惨劇。本当におかしな世の中になっています。そんな悲劇をなくすためには、やっぱり「お母さん」。お母さんが、ほんの少し気持ちをラクにし、心を広くすればいいんです。

自然界、動物界を見ならおう

今から20年前のこと。マイケル・W・フォックスというキツネの研究者が、著書『アースマインド―人類はどこへ行くのか』（講談社）の中で、人間をこう表現しています。

「人間は進化の流れの中で、地球上の子どもとしては3歳児同然。わけのわからないことをしでかし、一番手のかかる駄々っ子である。このままいって、大人になる前に、暴走して母なる地球を壊してしまわなければいいが…」。

今は、地球も崩壊寸前です。火山の噴火、地震、台風の猛威を見せつけられ、あたふたするのではなく、より有用な情報としてそれを受け入れること。その度量が大事です。

たとえば、そこに立っている大木は何かを主張しているでしょうか。鳥が止まったら100円、酸素をつくったので100円とは言いません。クマもキツネも森の中を種を蒔いて（フンをして）歩くけれど、1万円払ってとは言いません。それと同じ、お母さんは子どもに、面倒を見ているのだから対価をよこせとは言いません。この無償の愛がすべてです。動物や大自然は、何も言わずただニコニコと、自分たちのすべきことをしているだけ。私たち人間も、これを見ならえばいいのです。

利便性を追求するあまり、世の中のあらゆることがおかしくなっていることに気づくことができるのは「お母さん」です。母グマが子どもに生きる術を示すように、お母さんが、毎日の生活の中で子どもたちに伝えていくべきことはたくさんあります。クマの生き方や大自然から、改めて感じていただけたらと思います。

取材を終えて

クマの子育てと響き合う

ある記事を読み、クマ牧場の前田さんに会いたいと思った。子育てというテーマを追求している私の中に、感じる何かがあった。わが子よりも、クマの子育てを選んだ前田さん。どれほどの葛藤があったろう。多くの批判も受けたに違いない。それでも彼女がクマに自分の夢を重ねた意味、そこに私は子育ての原点があると確信した。ひとりの母親が人生を賭けてやろうとしたことは…。

お会いして驚いた。前田さんは、小柄でかわいい女性。どこにクマと生きるパワーがあるのだろうと。だが話を聞きながら、「半端ではない人生」を生きたひとりの女性、そして、母親の「本当の愛」を見たような気がした。

偶然か必然か。前田さんの存在を知る以前から、自分の講演会でクマの話をすることがあった。お母さんたちにこんな質問をする。「もしあなたが子どもと2人森を歩いていて、目の前にクマが現われたらどうする？」。死ぬふりをする？ 全速力で逃げる？

「震えながらも、子どもの体を両手でしっかり抱き、クマにやられないように精一杯守る」と多くの母親たち。が、それでは親も子も順番にやられるだけだろう。私なら一か八かこんな行動に。母グマの目を堂々と睨みつけ、「アンタもお母さんなら、子どもが殺されたらどんなに悲しいかわかるでしょ。もしアンタがこの娘を殺したら、私は許さない！」と。

「母親はそれくらい命がけで子どもを守るでしょ！」と言いたかったのだが、母グマは子グマを守るために、ダンプカーにも体当たりしていくと聞き、クマと響き合うものを感じた。動物も人間も、子を思う親の気持ちは同じ。だからこそ、お互いが共存し合える社会でなければならない。地球上では、人が人を殺し合う戦争をし、親が子を虐待し、子が親を殺すなど、悲しく、恐ろしいことばかりが起きている。自然界がどんどん崩れている。

改めて、今回の出会いに感謝したい。クマの子育てを通じて、人が生きるという意味、つまり「子育ての原点」を教えてくれた前田さん。今日のような話をお母さんや子どもたち…ひとりでも多くの人に伝えていく必要がある。こんなに素敵な母親が登別にいるということを伝えるのが、私の役目なのかもしれない。　（藤本裕子）

まえだ なおこ●北海道旭川市生まれ。北海道大学卒。1975年にのぼりべつクマ牧場飼育係として入社。76年、雑誌『ヒグマ』を創刊。79年、「ヒグマの会」発足、事務局を担当。84年、ヒグマ博物館学芸員、学術課長に就任。NGO自然林再生ネットワーク事務局、室蘭工業大学、北海道大学の非常勤講師も務める。

『ヒグマが育てる森』
著者／前田菜穂子
発行／岩波書店

ラジオNIKKEI 全国10都市横断　親と子のトークライブショー

第11回 常田富士男 民話の世界（ときたふじお）

文部科学省後援

入場無料
来場者全組にCDプレゼント！

テレビ「まんが日本昔ばなし」の「むか～しむか～し」でおなじみの常田富士男が、馬にまつわる民話などを絶妙な語りで朗読する「常田富士男　民話の世界」。人から人へ語り継がれた民話を通じて、心のぬくもりや命の大切さ、そして日本語の美しさを見つめなおしていただけるイベントです。お子様からあらゆる世代の方にお楽しみいただけます。常田さんの語りと音楽・照明でつくる想像力ゆたかなステージを皆様でお楽しみください。

■主　催／ラジオ NIKKEI
■特別協賛／ JOA 日本馬主協会連合会
(社)札幌馬主協会、(社)函館馬主協会、(社)福島馬主協会、(社)新潟馬主協会、(社)中山馬主協会
(社)東京馬主協会、(社)中京馬主協会、(社)京都馬主協会、(社)阪神馬主協会、(社)九州馬主協会
■後　援／文部科学省
福島市教育委員会、新潟市教育委員会、京都市教育委員会、北九州市教育委員会、名古屋市教育委員会
七飯町教育委員会、札幌市教育委員会、船橋市教育委員会、世田谷区教育委員会、大阪市教育委員会

公演日	都市名　会場名
7/20(日)	福島・福島テルサ　FT ホール
7/21(祝)	新潟・新潟市民プラザ
7/26(土)	京都・京都会館　第 2 ホール
7/27(日)	福岡・北九州芸術劇場　大ホール
8/2(土)	名古屋・愛知県女性総合センター　ウィルあいち ウィルホール
8/16(土)	函館・七飯町文化センター　パイオニアホール
8/17(日)	札幌・札幌市こどもの劇場　やまびこ座
8/23(土)	千葉・船橋市民文化ホール
8/24(日)	東京・世田谷区民会館　ホール
8/30(土)	大阪・御堂会館　大ホール

※詳しくは http://www.radionikkei.jp/minwa/ をご覧ください。

■お申込み／観覧ご希望の方は、希望会場名、希望人数、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、ハガキ、またはインターネット http://www.radionikkei.jp/minwa/ で。〒 107-8373 ラジオ NIKKEI「第 11 回 常田富士男　民話の世界」事務局係
■応募締切／ 2 週間前の金曜日。応募者多数の場合は抽選。当選者には招待状を発送。福島、新潟公演は特別枠を確保中。至急、お電話にてお問合せください。
■お問合せ／全国 10 都市横断　親と子のトークライブショー「第 11 回　常田富士男 民話の世界」事務局まで。TEL03-3583-8262

はみだし情報 ●甲府市地球温暖化対策地域協議会が同市と組み、実施家庭100を募り、ゴーヤの苗4本と栽培ネット2枚、肥料を贈呈する。「緑のカーテン」で窓の省エネをはかろうという試み。